

学術フロンティア・サブプロジェクト①異文化研究としての「国際日本学」の構築

国際日本学シンポジウム 「人体と身体性」

- 日 時：2009年11月1日（日）～11月3日（火）
- 場 所：アルザス欧州日本学研究所（フランス・キーンツハイム）
- 主 催：法政大学国際日本学研究所、フランス国立科学研究学院（UMR8155）、ストラスブール大学日本学部、アルザス欧州日本学研究所

国際日本学研究所 [HIJAS] が主催する「国際日本学」を掲げた国際シンポジウムは、2005年のパリ・シンポジウムが第1回であり、その後2007年にアルザス・シンポジウムに姿を変えて、今回で5回目を数える。日本と日本文化とを内外の二つの視点から同時に照射し、そこにこれまでにない立体的な視像を得ていこうという国際日本学の試みは、まずは、そのような方法論から生じる原理的な問題を問うことで展開されてきた（「国際日本学とは何か」2005年、「ことばとことばを越えるもの」2006年、「翻訳不可能性」2007年）。そのような基礎作業を踏まえて、方法論を具体的に適用することの第一弾として、2008年のシンポジウムでは天皇制がテーマとして取り上げられた。続く今回2009年シンポジウムでは身体論（人間の身体、人体の問題）が取り上げられることとなった。

*

問題の広さ複雑さに鑑みて、今回もシンポジウムに先立って4回の事前勉強会を開催した。それぞれの勉強会は別のページで報告されているので、ここではその詳細には立ち入らない。それぞれの勉強会には身体論のさまざまな専門家にお越しいただき、レクチャーをしていただいた（その内の3人にはシンポジウムそのものにも参加していただいた）。4回のテーマと講師は以下であった。①2009年7月4日「身体と姿勢——東アジアの伝統の中で」（ポルドー大学 アンヌ・ゴッソ氏）、②2009年7月24日「人体を総合的に考える——文化を生む人間・文化に条件づけられる人間」（人類学者 川田順造氏）、③2009年9月30日「3DCGに基づく能の所作単元の分類と型付の解釈」（法政大学デザイン工学部 岩月正見氏）、④2009年10月9日「奇形の背後にあるもの」 伝

統的なまた現代の視覚メディアにおける妖怪図」（法政大学グローバル教養学部 ジリア・パップ氏）

*

さてこのような準備を経ての11月初頭3日間のアルザス・シンポジウムでは、日本（法政大学）から参加の8名——発表順で、小秋元段、小林ふみ子、ジリア・パップ、相良匡俊、川田順造、山中玲子、岩月正見、安孫子信一と、ヨーロッパから参加の8名——同じく発表順で、Rajyashree Pandey（ロンドン大学）、Josef Kyburz（パリCNRS）、Peter Ackermann（エルランゲン＝ニュルンベルグ大学）、Lucia Dolce（ロンドン大学）、Yves Cadot（パリ第7大学）、Martina Ebi（チュービンゲン大学）、Christian Oberlaender（ハレ＝ヴィッテンベルグ大学）、Christian Steineck（チューリッヒ大学）——の計16名が、全部で15個の研究発表を行い（1個が2名による共同発表）、また各発表後には参加者間で活発な議論を展開した。

ここで今回の発表の内容を簡単に確認してみたい。第一に発表の題材を整理してみれば以下となる。まず人間の身体が、文学的に文字で表現された場合を扱ったものが2編あった——Pandey（源氏物語）、小秋元（軍記物語）。また図象・絵画で表現された場合を扱ったものは3編である——小林（あぶな絵）、Kyburz（美術史）、パップ（妖怪図）。さらに演劇・音楽・スポーツでの人体の現れを扱ったものが3編あった——相良（明治の音楽教育）、Cadot（柔道）、山中・岩月（能）。さらに宗教での現れを扱ったものは1編である——Dolce（日本仏教）。そして医学・医療、またそれとつながる倫理・哲学での身体の扱いを取り上げたものは3編である——安孫子（西周の身体論）、Oberlaender（解剖学の成立）、Steineck（生命倫理）。最後に、日常的な身体使用、身体に関わ



研究発表の様子（左から安孫子所長（法政大学教授）、ジョゼフ・キブルツ教授、サカエ・ムラカミ＝ジルー教授）



会場の様子

る言語使用の観察から論じたものが3編あった——Ackermann (ボディ・ランゲージの問題)、川田 (身体使用の日本・西欧・アフリカからの三角測量)、Ebi (身体部位名詞の使用)。

第二に時代的に見れば以下となる。明治以前の伝統的日本から主に資料を得ていたものが6編あった——Pandey、小秋元、小林、Kyburz、Dolce、山中・岩月。また明治近代日本を中心に置いたものは4編である——相良、Cadot、安孫子、Oberlaender。さらに主に現代を問題にしていたものは4編である——Ackermann、川田、Ebi、Steineck。最後に文字通りに通史的であるものが1編あった——パップ。

第三に研究方法ということ言えば次のようになる。文学史、美術史、思想史、社会史を含む、そして時に現代をも扱う、歴史的方法を用いていたものが圧倒的に多く11編あった——Pandey、小秋元、小林、Kyburz、パップ、相良、Dolce、Cadot、安孫子、Oberlaender、Steineck。それ以外では3編で言語学、文化人類学が方法として用いられていた——Ackermann、川田、Ebi。最も異色を放っていたのは、それ自身文学史に属するであろう能の所作の研究に、最新の工学的手法を適用したものであった——山中・岩月。

以上の学際的にきわめて多様で多彩な内容が、‘公用語’としては日本語と英語を用いて発表され、また討議されていった。その内容を以下かいつまんで述べてみよう。

*

人体 (human body) は、それ自らに備わる感覚器官が知覚する最初の対象であり、意識もそこに根付いている。知覚の対象として、人体はすでに文化的概念であって、人体の知覚も表象も使用も、文化によって異なっている。そして人間 (person) や自己 (self) の観念も、それが人体と不可分である限りで、文化によって異なったものになる。[Kyburz、Ackermann、川田、Ebi]

西洋の概念に従えば、人間は明確に分かたれた二つの構成要素、すなわち、自我 (精神、靈魂、心) と呼ばれる抽象的存在と身体とから成っている。人間が身体を対象として立てて思考し、観察し、使用しうるのは、この主観・客観の二分に依っている。西洋人は自らの身体 (body) を観察する際に距離を置くが、そのような距離が客観的な精査に道をひらき、身体を科学の対象とすること (医学、体操、具象芸術、宗教思想、哲学、人類学)、また求める効果を生みだす道具とすること (声、音楽、踊り、演劇、労働、鍛錬、スポーツ) を可能としたのである。それと直面した近代日本については、独自の感じ方を維持しながらも、西洋の概念にむしろかなり上手に適応していったことが確認されている。[相良、安孫子、Oberlaender、Steineck]

さて、それでは伝統日本では、人体そして人間はどう扱われていたのか。長大な『源氏物語』を通読するとき、西洋の読者は、主要登場人物たちの感情や物腰、振舞、声、しぐさ、表情のよくてきた描写を得ることになる。しかし、いくら探しても、登場人物たちの身体の描写を見いだすことはないであろう。仮に絵巻を取り出し、身体の絵画的表現を吟味してみても、事はさして改善されないであろう。リアルな、それと認識される顔つきを探そうとして、彼が出会うのは、あいまいな、ただ約束事に従って描かれた表情なのである。人間はここでは身体というより、情動であり、「雰囲気」、物腰、佇まい、色合いであり、つまりは、読者の精神中に感覚知覚を通じて喚起されるものなのである。こうして西と東とでは、身体が、あるいは身体の一部が、知覚され、概念化され、表現され、使用される仕方は、根本的に異なっている。東では、身体 (顔を別として) をことばで描写したり図像で表現する際、とかく、あいまいに、ただ約束事に従うことで済ませることが多い。他方、西のやり方では、反対に、個別化され、リアルで、的確であることが求められるのである。その根本的な違いは、身体を巻き込む他のあらゆる領域で確認される。すなわち、宗教上の信念や実践 (清め、汚れ、死)、性差や社会性 (衣装、しぐさ、態度、物腰)、治療法 (不健康、病気)、舞台芸術、武術といった領域で確認される。それだけではなくもっと短命な現象、エロティックなあるいはセクシャルな行為、娯楽的な諸現象においてもそうなのである。[Pandey、小秋元、小林、Kyburz、パップ、Dolce、Cadot、山中・岩月]

さらに精査を行なっていけば、同じく根本的な違いが、日本の近代化にもかかわらず、その近代日本を貫いて、やはり現代に至るまで維持されていることが確認されるのである。[パップ、Ackermann、川田、安孫子、Ebi、Steineck]

こうして、どのような角度を選びそこから身体を眺めても、たんなる表面的現れを超えた西と東との違いを、われわれは確認していくことになる。人体は、そして人間は、西と東とで異なったものとしてある。こうしてシンポジウムでは広く東西比較の視点から、日本における人体観・人間観のさまざまな現れが、さまざまに突き合わされ、吟味されていった。人間身体論の大きさと複雑さにもかかわらず、いやむしろその大きさ複雑さゆえに、今回のアルガス・シンポジウムでも、国際的でありかつ学際的であるという、国際日本学の方法論の力強さと有用性が改めて確認されていったと考える。プログラムの詳細を含め、議論の細部を近刊の報告集でぜひ確認していただきたい。

【記事執筆：安孫子 信】

(法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授)

Academic Frontier Sub-project 1: Developing 'International Japanese Studies' as Research on an 'Other' Culture

International Japanese Studies Symposium: 'Body and Embodiment'

Date Sunday, 1 November - Tuesday, 3 November 2009
 Venue Centre Europeen D'Etudes Japonaises D'Alsace (Kientzheim, France)
 Sponsors Hosei University Research Center for International Japanese Studies, French National Centre for Scientific Research (UMR8155), Strasbourg University Japanese Faculty, Centre Europeen D'Etudes Japonaises D'Alsace

This symposium consisted of 16 presentations by eight participants from Japan and eight participants from Europe. We discussed the Japanese view of the body from ancient times to the present day, and not just within the

so-called high culture of religion, ethics, literature, art and drama, but also within sub-cultures such as Manga and pornographic images. Furthermore, reflections of the body view were sought not merely in defined aspects of society such as medicine and education, but also in everyday language and physical behaviour etc.: in other words, the basic structure of society itself. Investigations started out from these areas, and returned to the following fundamental issues concerning the Japanese view of the body. There is a tendency to consider the body as having some sentimental and human relatedness or even sacredness, and in that respect it opposes the Western view of the body which aims to draw a sharp line between mind and body. However with the age of modernization, the Western view of the body was accepted without much difficulty, and yet the traditional view of the body was never abandoned. What might be called the flexible structure of the Japanese view of the body was thus brought out through this symposium.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

学术事业推进项目① 构筑以异文化研究为视角的“国际日本学”
 国际日本学学术研讨会
 “人体与身体性”

时间：2009年11月01日(周日) -11月03日(周二)
 地点：阿尔萨斯欧洲日本学研究所 (法国·肯兹海姆)
 主办单位：法政大学国际日本学研究所、法国国立科学研究生院 (UMR8155)、斯特拉斯堡大学日本学部、阿尔萨斯欧洲日本学研究所

在此次学术研讨会上，来自日本的8位研究人员和来自欧洲的8位研究人员分别做了16场学术报告，从宗教·伦理·文学·美术·戏剧等主流文化的角度和漫画、

黄色图画等非主流文化的角度，对日本人自古以来的人体观进行了全面地讨论。在此基础上，与会者还从医疗、教育等特定的社会场景和日常用语、日常形体动作等基础的社会场景，探讨了日本人人体观的外在反映。会议以上述研讨为出发点和落脚点，得出根本结论认为，日本人人体观的特征在于将人体视作一种感情、一种人际关系以及一种带有某种神圣性的物质。虽然日本人人体观的这一特征，与严格将身心区分开来的西方人体观大相径庭。但是在近代化的过程中，西方的人体观并未受到太多阻力就为日本人所接受了。而在接受西方人体观的同时，日本人又没有抛弃掉自身传统的人体观。因此可以说，日本人的身体观具有着一种独特的软构造。

【执笔者：安孙子 信
 (法政大学国际日本学研究所所长·文学部教授)】

학술 프론티어 서브프로젝트① 이문화 연구로서의「국제 일본학」의 구축

국제일본학 심포지움: 「인체와 신체성」

· 일 시 2009년 11월 1일 (일) ~11월 3일 (화)
 · 장 소 알자스 구주 (欧州) 일본학연구소 (프랑스 킨츠하임)
 · 주 최 호세이대학 (法政大学) 국제일본학연구소, 프랑스 국립과학연구학원 (UMR8155), 스트라스부르 (Strasbourg) 대학 일본학부, 알자스 구주 일본학연구소

이번 심포지움에서는 일본에서 참가한 8명과 유럽에서 참가한 8명, 합계 16명이 일본인의 인체관에 대해 발표했다. 고대에서부터 현대에 이르기까지 종교·윤리·문학·미술·연극 등, 고급문화뿐만 아니라 만화나 외설적인 그림과 같은 서브 컬처에 나타나

있는 인체관에 관해서도 언급되었다. 또한, 그와 같은 인체관이 의료나 교육과 같은 사회의 특정 분야뿐만 아니라 일상 언어나 일상적인 신체 동작과 같은, 이른바 사회의 기초구조 그 자체에 어떻게 반영되어 있는지에 관해서도 탐구되었다. 이와 같은 제반 사항들을 음미하는 것으로부터 출발하여 귀착된 근본 문제는, 일본인의 인체관은 인체를 감정이나 인간의 관계성, 나아가 성스러움을 지닌 것으로 간주하는 경향을 띠고 있다는 점, 그 결과 심신 이원론을 근본으로 하는 서양의 인체관에 대립하는 것이라는 점, 그럼에도 불구하고 근대화 과정에 있어서 이러한 서양의 인체관이 큰 곤란 없이 받아들여졌다는 점, 아울러 서양의 인체관을 받아들이면서도 전통적인 인체관을 버리지 않았다는 점 등으로 집약된다. 이번 심포지움을 통해 일본인의 인체관이 갖고 있는 유연성이 명백해졌다.

【기사 집필: 아비코 신 (安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장·문학부 교수)】